

ものの見方

2024.8.29

世の中は、めまぐるしく動いており、情報の量も膨大である。主体性をもち、しっかりと地に足をつけて前に進んでいかないと、流されたり、飲み込まれたりしそうである。今日の内外の実状を的確に捉える必要がある。落ち着いて、長い目で、根本的に、多面的に考察しなければならない。

こういったむずかしい問題を考えるには、3つの原則がある。これは、人生のあらゆる問題に応用できる。

第一に、何事によらずものを観察し考察するには、決して目先に捉われないことである。できるだけ長い目で見ることである。

第二は、ものの一面にこだわらず、できるだけ多面的に、また、できるならば全面的に考えることである。

第三は、物事の枝葉末節に走らないことである。できるだけ根本的に考察することである。

物事を目先で、一面的に枝葉末節で見ると、長い目で、多面的に、あるいは全面的に、根本的に見るとでは、結論が正反対になることすら珍しくはない。

これは、一人の人間についてもそうである。ある人を、ほんのその場の一面を見て、その人の枝葉末節を取り上げ、あれはこうだという。その人の生活や行動を長い目で見て、その人のいろいろな面を観察して、その人の根本や心のもち方などを深く掘り下げて、この人はこうだという。前者と後者とでは、だいぶ違ってくる。正反対になる場合もあることだろう。したがって、浅はかというのが一番よくない。場当たりというのもわるい。問題が重大になればなるほど、このことが重要度を増してくる。

一人の人間が、目の前にいる子どもだとしたら、どうだろう。浅はかさは、先入観や固定観念、決めつけに結びついてしまうかもしれない。大人以上に、子どものことは、長い目で、根本的に、多面的に見ていかなければならない。そうしないと、子どもの健全な成長を促すという、大事な役目を果たせなくなってしまう。

物事を、ああでもない、こうでもない、本当にそうだろうかなどと見ていく姿勢が重要である。もっと違うことがあるかもしれないという思いが、ものの見方を変えていく。3つの原則をもとに、今まで以上に、ものの見方を鍛えていかなければならない。